博士学位論文審査要旨

２０１２年7月２１日

論 文 題 目： セルフヘルプ・グループへの継続的参加による自己物語の構成と自己変容
－若年性認知症の妻を介護する団塊世代の夫を事例として－

学位申請者： 水島　洋平

審 査 委 員：

主　査： 総合政策科学研究科　教授　藤本　哲史

副　査： 総合政策科学研究科　教授　中川　　清

副　査： 日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科　准教授　末盛　慶

要　　旨：

本論文は、要介護状態にある若年性アルツハイマー型認知症の妻を在宅介護する団塊世代の夫が、家族会への継続的参加を通して自己物語を構成することにより、いかに自己変容を経験するかを明らかにすることが目的である。特に、（1）家族会の発足当初から継続的に参加する夫介護者と、家族会に中途加入し参加する夫介護者では、自己物語の構成プロセスや内容にどのような差異があるのか、また、（2）夫介護者は家族会への継続的参加を通して、妻に対する感情や、夫としてのアイデンティティをどのように変容させていくのか、の２点に焦点をあてて分析を行っている。

本稿の構成は、以下の通りである。第１章では、夫介護者の介護役割の特徴を明らかにし、家族会をセルフヘルプ・グループとして位置づける作業を行なっている。第２章では、「自己開示」や「自己物語の構成」等の概念を整理し、本稿における理論的分析モデルを提示している。第３章では仮説を設定し、続く第４章では、調査および分析方法、ならびに分析手続きに関して述べている。第５章では、夫介護者５名の事例を取り上げ、自己物語の内容と構成プロセスを明らかにし、夫としてのアイデンティティの変容に関する分析を行なっている。第６章では、夫介護者たちが家族会での経験を通していかに自己変容を成し遂げたのか、自己物語論と物語療法の視点から考察している。そして終章では、本稿の限界と課題について論じている。

非参加観察法に基づく質的データの分析の結果、全ての夫に共通して、妻とのコミュニケーションの困難さ、食事介助、排泄ケアなど、日常的問題に起因する葛藤が自己物語の内容に関連しているものの、中途加入した夫にはこれらに加えて、妻の意思や意図の解釈に重点を置く傾向があることが明らかになった。また、家族会発足当初から参加している夫は「セラピスト役割」を担うことにより、また中途加入した夫は「クライエント役割」を担うことによって、夫としてのアイデンティティを保持しながら妻に対する感情を変容させていく傾向が確認された。

本稿には、サンプルの代表性や質的分析結果の一般化の問題など、方法論に関わるいくつかの点において限界や課題はあるものの、これまでの研究では取り上げられることのなかった若年性アルツハイマー型認知症の妻を介護する団塊世代の夫の家族会参加に着目し、彼らの自己物語の構成と自己変容の過程を明らかにしたことは重要な学術的貢献といえる。また、家族会の集団相互作用を通して夫たちが経験するアイデンティティ変容のあり方を明確化したことは、セルフヘルプ・グループ論および自己物語論に対する新たな知見の提供につながったといえる。よって、本論文は、博士（政策科学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１２年7月２１日

論 文 題 目： セルフヘルプ・グループへの継続的参加による自己物語の構成と自己変容
－若年性認知症の妻を介護する団塊世代の夫を事例として－

学位申請者： 水島　洋平

審 査 委 員：

主　査： 総合政策科学研究科　教授　藤本　哲史

副　査： 総合政策科学研究科　教授　中川　　清

副　査： 日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科　准教授　末盛　慶

要　　旨：

2012年7月21日（土）午前11時30分より午後0時30分まで、博遠館202室にて学位申請者に対する総合試験を行った。申請者は博士学位論文に関して簡潔かつ論理的な報告を行った。上記審査委員からの質疑に対しては、的確な回答をもって本論文の学術的価値を示し、同時に社会構築主義や臨床社会学に関する十分な学識を有していることを証明した。

学位申請者は、先行研究を検討するために非常に多くの英文文献を用いており、その内容に関する質疑に対しても適切に回答がなされていることから、博士学位にふさわしい英語の外国語能力を持つと判断する。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： セルフヘルプ・グループへの継続的参加による自己物語の構成と自己変容―若年性認知症の妻を介護する団塊世代の夫を事例として―

氏　　名： 水島　洋平

要　　旨：

本稿の目的は、要介護状態にある若年性アルツハイマー型認知症の妻を在宅介護する団塊世代の夫(以下、夫介護者)が、家族会への継続的参加により自己物語を構成することで、いかに自己変容を経験するのかを時系列的に明らかにすることにある。具体的な研究課題は、以下の２点である。第一に、家族会の発足当初から継続的に参加している重度もしくは最重度認知症の妻を介護する夫と、家族会へ中途加入して継続的に参加している中等度認知症の妻を介護する夫では、自己物語の内容と構成プロセスが異なるのかを明らかにする。第二に、夫介護者は家族会への継続的参加を通して、妻に対してどのような感情を抱き、夫としてのアイデンティティを変容させるのかを明らかにする。

本稿の構成は、以下の通りである。第１章では、夫介護者による介護役割遂行の特徴を明らかにしたうえで、本稿における分析のコンテキストとなる家族会をSHGに位置づける作業を行なった。第２章では、本稿の理論的枠組みを提示する。第１節では、認知症の妻のBPSDに対する夫介護者の葛藤生起のメカニズムを理解するための枠組みを提示した。第２節では、夫介護者の家族会への継続的参加における自己開示の位置づけを確認したうえで、自己物語を構成するための条件として、自己開示の機能である「自己明確化」と「社会的妥当化」を取り上げ、その理論的意味合いに関して論じた。第３節では、夫介護者の家族会への継続的参加と自己物語の構成の関係性について、自己物語論の視点から論じた。第４節では、夫介護者がBPSDの背景にある妻の意思の設定と意図の解釈をいかに行なうのかに関して、Festinger(1954)の社会的比較過程理論を用いて説明を試みた。第５節では、分析モデルを提示した。第３章では、仮説を設定した。第４章では、質的分析を用いる意義を論じたうえで、男性介護者の家族会と夫介護者の概要について説明をし、調査方法と分析方法、分析手続きに関して述べた。第５章では、夫介護者５名の事例を取り上げ、自己物語の内容と構成プロセスを明らかにし、妻に対してどのような感情を抱き、夫としてのアイデンティティを変容させるのか分析を行なった。第６章では、夫介護者がおかれた認知症介護の心理ステップを明らかにしたうえで、家族会におけるどのような実践を通して自己変容を成し遂げたのかを自己物語論と物語療法の視点から考察した。終章では、本稿の限界と課題を提示した。

分析モデルから、本稿における仮説として、以下の４つを設定した。第一に、「夫介護者は、妻のBPSDを解釈するために必要な代替の枠組みを持たないため、BPSDの意図を問い、その変容を求める形式のコミュニケーションをとる傾向が見られる」との仮説である。第二に、「家族会の発足当初から継続的に参加している重度もしくは最重度認知症の妻を介護する夫には、直接的な身体ケアの困難や葛藤を中心とした自己物語を構成する傾向が見られる」との仮説である。第三に、「家族会の発足当初から継続的に参加している重度もしくは最重度認知症の妻を介護する夫には、自らの介護経験を回顧し、新規参加や中途参加者に助言を行なうことによって、妻への感情の変化や夫としてのアイデンティティを変容させる傾向が見られる」との仮説である。第

四に、「家族会へ中途加入して継続的に参加している中等度認知症の妻を介護する夫は、BPSDの背景にある妻の意思や意図の解釈を中心とした自己物語を構成し、参加者からの意見を参照することによって、妻への感情の変化や夫としてのアイデンティティを変容させる傾向が見られる」との仮説である。

家族会への継続的参加を通した参加者との相互行為によって、夫介護者の自己物語が構成される過程に着目しながら、妻に対してどのような感情を抱き、夫としてのアイデンティティを変容させるのか分析した結果、家族会の発足当初から継続的に参加している重度もしくは最重度認知症の妻を介護する夫による自己物語の内容は、妻とコミュニケーションが取れないことによる葛藤や、食事介助、排泄ケアの困難や葛藤を中心としたものであったが、家族会に中途加入して継続的に参加している中等度認知症の妻を介護する夫にも同様の傾向が見られたものの、BPSDの背景にある妻の意思や意図の解釈が中心であることが特徴であった。自己物語の構成プロセスに関しては、家族会の発足当初から継続的に参加している重度もしくは最重度認知症の妻を介護する夫は「セラピスト役割」を担うことによって、家族会へ中途加入して継続的に参加している中等度認知症の妻を介護する夫は「クライエント役割」を担うことによって、夫としてのアイデンティティを保持しながら妻に対する感情を変容させている傾向が確認された。

本稿の限界と課題として、第一に、サンプリングの問題が挙げられる。若年性アルツハイマー型認知症の妻を介護する団塊世代の夫を分析対象に選択した点は本稿のオリジナリティであるが、サンプリングに偏りがあるため知見の一般化には限界がある。しかし、人口が多い団塊世代の男性が今後介護役割に直面する可能性は高く、今回のサンプルを対象とする分析から得られた知見には意義があると考える。今後は、他の世代の夫介護者や他の家族会に参加している者についても同様の傾向が確認できるのか検討する必要がある。第二に、夫介護者の語りへのアプローチ方法についてである。ナラティヴの視点からのアイデンティティ・アプローチには、個人全体に焦点づけるとともに、アイデンティティの諸要素がライフ・ストーリーを通してどのように統合されるのかに焦点づけることができることが長所であり、個人描写のレベルを超えたアイデンティティの原理を一般化することが困難であることが短所である。

このような限界や課題はあるものの、本稿ではこれまでの研究で取り上げられることのなかった若年性アルツハイマー型認知症の妻を介護する団塊世代の夫の家族会参加に着目し、彼らの自己物語の構成と自己変容の過程を明らかにしたことは重要な学術的貢献といえる。また、家族会の集団相互作用を通して夫たちが経験するアイデンティティ変容のあり方を明確化したことは、SHG論および自己物語論に対する新たな知見の提供につながったといえる。

(2,589 文字)